高知大学共通教育広報誌［パイプライン］

PipeLine

45
2015.6

特集
初年次科目
初年次科目授業の感想、意義、受講にあたってのアドバイス等

No.45 Contents

特集「初年次科目」	P1~7
共通教育自己点検・自己評価部会の活動	P8～9
共通教育実施委員会からのお知らせ PROGテストの実施について	P10～11

特集

初年次科目

初年次科目授業の感想、
意義、受講にあたっての
アドバイス等

初年次科目

「共通教育科目」には、「初年次科目」「教養科目」「共通専門科目」があります。今号ではその内の「初年次科目」を取り上げています。これは、入学後すぐに高校以前の学びの転換を図り、自分で考え行動できる力、他者とコミュニケーションできる力、表現できる力などを修得するものです。

「初年次科目」は、「何をなぜどのように学ぶのか」を学ぶ「大学基礎論」、専攻する学問の輪郭を学ぶ「学問基礎論」、「大学英語入門」「英会話」、「情報処理」、課題探求及び解決能力を身に付ける「課題探求実践セミナー」という必修科目からなっています。

Part 1　学生記者から

教育学部
学校教育教員養成課程
2年

六川　公美子

「課題探求実践セミナー」について

教育学部の学生にとって、共通教育科目とは、教員として必要となる基礎的な知識を、専門科目よりも広く学ぶものです。私は1年を通じて行われる「課題探求実践セミナー」を受講しました。この授業では、実際に子どもたちと関わることを通じて、「子どもを理解する」ことを目的としています。

ここでは、子どもたちと接するまでの過程において、企画書の作成や話し合いなど事前準備をしっかりすることがとても重要なのだということを学びました。特に、実際に子どもたちと関わることで実感的に捉えた課題を、仲間と共有しながら分析・考察していく活動がとても有意義でした。

このように「課題探求実践セミナー」では実践的なことを学び、経験することができます。子どもたちとの接し方や子どもたちの現状について実感的に知ることで、実際に教員という立場に立ったときにスムーズに対応できる力を養うことができると思います。

教育学部
学校教育教員養成課程
4年

植田　泰郎

「大学基礎論」について

「初年次科目」には、「学問基礎論」という授業があります。これは高知大学の先生方が実際にどのような研究をされているのかを知ることができる授業です。私はこの授業で、8000字のレポートを書きました。しかし、いきなり書いたわけではありません。参考文献はどこにあるのか、どのようにレポート内に示せば良いのか、レポートの基礎となるものをしっかりと教わったからこそ書けました。

私は現在４年生でたくさんの授業を受けてきましたが、この授業でのレポートより多い文字数を書いたことはありません。ただそのおかげで、他の授業のレポートでは、書き方や、参考文献の示し方などに注意を受けたことはありません。「学問基礎論」で学んだことはずっと役に立ち続けています。

また、私が現在学んでいる専門分野もこの「学問基礎論」で先生が研究していた分野です。この授業以来、その分野について興味を持ち始め、今では自分から学びたいと思い、意欲的に取り組んでいます。専門の授業の中でも、「学問基礎論」で学んだことが出てくることがあり、予習は完璧です。

このように、「初年次科目」の「学問基礎論」では、大学で学びの最初のきっかけを与えてくれるものであり、また、レポートなどのスキルを身に付けることができると思います。この授業から自分のしたいことを見つけることもできます。すばらしいですね。

理学部
理学科
4年

小竹　雄太

「初年次科目」

初年次科目とは、これから始まる大学4年間を有意義なものにするために行う最初の講義であったと思います。

「大学基礎論」では、社会が大学卒業後の学生に求めるものは何なのかを知ることができました。「大学英語入門」、「英会話」では今の社会に必要な英語力を鍛える、あるいは学ぶきっかけを持てました。自分のレベルに合った授業を受けられたのも良かったです。「情報処理」ではパソコンの使い方を学ぶことができ、今までほとんどパソコンをまともに使った事が無かったのでとても助かりました。初年次科目で特に印象に残っている科目は「課題探求実践セミナー」です。い組、ろ組などの組以外で友達を作れたのもこの講義だったと思います。5、6人程度の班に分かれてグループワークを行いました。みんなで話し合いながらプレゼンを作っていくことに、大学の講義だなぁと感じたのを覚えています。人前でプレゼンするのも当時はあまりないことだったので、良い経験になったと思います。

理学部
応用理学科
4年

藤澤　彬

「初年次科目」

6科目の初年次科目は、高校までの学習スタイルから、大学での学習スタイルへ移行するため、更には社会人になる為の心構えについて、自分自身を見つめ直す時間でした。

大学は、自分自身がどうなりたいか、どうしたいかが大切です。しかし、そのようなことを考える時間を自分ではあまり作ることが出来ません。そんな中、大学1年目にこれらの授業があったことで、漠然としていた大学生の生活を、目的や目標といったより具体的なものにすることが出来ました。また、グループワークを取り入れた授業などから、仲間の大切さや個人に任される責任なども実感できるものです。さらに、どの授業も1時間目からの授業なので、1年生の内から生活リズムを整えることができ、新しい環境に適応するきっかけにもなりました。

最後に受講にあたってのアドバイスとして、授業後に自分自身で授業をもう一度振り返ることをお勧めします。

人文学部
国際社会
コミュニケーション学科
2年
藤原　奈穂

「初年次科目」について

「必修」というネガティブなイメージのある初年次科目だが、「大学から新入生へのサービス授業」と考えるとありがたいものだ。入学から言われ続けた「大学での学習は高校までとは全く違う」ことを最初に実感させてくれたものこそ、初年次科目の授業だった。

例えば“ミニゼミ”では、少人数ゼミナール形式の授業を通して、自分がいかに意見（発言）に慣れていないか、レポートを甘く見ていたかを思い知らされた。情報についての授業では、常識を批判する態度や、情報を整理して論理的な意見を組み立てることを初めて意識的に学んだ。また英会話・英語の授業によって、自分の英語力の衰えと受験英語の限界を自覚し、目標設定と自主学習の必要性を痛感した。

このように、初年次科目は高校生から大学生へと（半ば無理やりに）引きずり上げてくれる時間である。来年の受講生はこの機会を利用して教授にどんどん質問し、失敗を恐れずに大学生のコツを掴みに行ってほしい。

人文学部
社会経済学科
（平成27年3月卒業）

曽宮　理恵子

「大学基礎論」・「学問基礎論」で学んだこと

1年次の第1学期に「大学基礎論」、第2学期に「学問基礎論」を受講しました。

「大学基礎論」では、大学という専門性の高い教育機関での学び方を理解していきます。特に、高校時代では馴染みのなかった論文の書き方・読み方を理解することが重要だと思います。その時先生に教えていただいたことは、その後のレポートや卒業論文に大いに役立ちました。

「学問基礎論」では、前期で法律が好きになったこともあり法律の先生のもとで代理母の問題について研究しました。「学問基礎論」は自分でどの先生の授業を受講するか選択できます。同じ分野の研究をしたいと集まった仲間と意見を出し合いながら、専門性の高い話をしていくことができ、2年次に繋がる勉強ができました。

社会経済学科は経営学・経済学・法律学・社会学など様々な分野の先生がいらっしゃるので、この時点で何か1つの分野に決めても良いし、未知の分野に足を踏み入れるのも良いと思います。初年次科目は大学での学びの基礎になるため、どの科目も気を抜かずしっかりと学び取っていって欲しいです。

医学部
医学科
2年

釣井　採香

初年次科目

医学科での初年次科目は、一般教養から医学的事項を学び考える科目まで幅広くあります。

中でも、現役でご活躍されている医師の方から専門的な医学事項をご講演していただける授業は、医学のことについてまだ何も知らない1年次の私たちにとって、とても興味深いものです。またこの様な授業は、今後医学を詳しく学んでいくにあたり、意欲増進にも繋がる大変良い機会だと思います。

さらに、病院内で、コメディカルワーカーの仕事の見学や、患者さんに付き添う実習等があります。これらの実習は、実際医師になった時には感じにくい視点からの声をたくさん聞くことが出来る貴重な体験です。

この様に、医学科初年次では、まだ医学的知識や医療人としての心構えがしっかりと身についていない状態で、様々な新しい刺激をたくさん受けることで今後医師となる上で大切な考えを形作る、大切なことを学べると思います。

医学部
看護学科
2年

川路　真子

「大学基礎論」について

「大学基礎論」では、医学部で学んでいく見通しを立てるために、患者さんの視点と医療者の視点から、医療・医療者になるとはどういうことか、ということについてグループワークで意見を出し合い、自分たちなりの考えを導いていきます。患者さんの視点から医療を考えるための附属病院での外来患者に付き添う実習では、実際に患者さんと接することで気付くことが多々あり、実習に行く前の準備がとても大切であるという、今後の学生生活で非常に重要なことを学びます。ミニレクチャーでは、現場で働く医療者の方からお話を伺います。医学や薬学など他の医療者からのお話を聞くことは、各々の部署が独立して動いているのではなく相互に協力し合うことが患者さんにとってより良い医療へ繋がるということを学ぶことができるという点で、非常に有意義です。グループワーク後の発表においては、同じ課題でも医学科の学生と着目する点やアプローチの仕方が違っていて、とても興味深いです。

愛媛大学大学院
連合農学研究科
生物環境保全学専攻
（平成27年3月修了）
粂川　義雅

初年次科目（英会話）を受講して

私は今まで英会話という機会に恵まれなかった、ないしは活かすことができなかったため、英文を読むことはできたが、会話をするとなると話は別だった。今までは、一人のALT（外国語指導助手）が大人数相手に英語を話すスタイルが主であったが、初年次科目の英会話授業では、少人数クラスであるため教員との距離が近く感じられる環境で英会話を学ぶ機会が得られ、嬉々としていた。しかし実際は燦々たるもので、頭の中で翻訳したり、話すときに文法の事などを考えるせいでどうしてもワンテンポ遅れてしまったのである。この授業を受けて学んだことは、英会話において最も大切なことは単語力であること、そして単語を一々訳さないことである。イメージとしては単語を聞いてその意味が頭に浮かべばよい。また、文法は気にせず、とにかく話すことである。少人数の授業であるため、これらを実践する機会はいくらでもあったため、一年間の授業を通して英会話が上達していくようと感じられた。実際に、幾度の海外調査を行った時に、この授業での経験は私にとって価値あるものとなり、このような授業を受ける機会を与えてくれた高知大学に深く感謝の意を示し、締めくくりとさせていただきたい。

高知大学大学院
総合人間自然科学研究科
農学専攻
（平成27年3月修了）
植本　千晴

初年次科目「学問基礎論」から学んだこと

私は１年生の第２学期に行われた学問基礎論で学んだことが、現在の研究室で活かされています。この「学問基礎論」の授業では、班ごとに１つの題材についてプレゼンの準備をし、皆の前で発表します。プレゼンを作っていく過程で、パワーポイントの使い方だけでなく、話の論理構成や相手が理解しやすい表現の仕方などを学びます。また、他の班のプレゼンを見て良いところを習い、さらには自分達の発表に対しての感想を聞くことによりプレゼンの反省点を見つけ、それを繰り返すことでプレゼンの作り方が上手くなります。この授業のおかげで、研究室における卒論や修論においても背景から目的、結果、考察に至るまで道筋を立てて論じていくことが出来るようになりました。そして、学会のポスター発表で、図やグラフ、写真を用いて相手が見やすくわかりやすいポスターになるように工夫した結果、中国四国植物学会で優秀発表賞を受賞することが出来ました。

特集

初年次科目

初年次科目授業の感想、
意義、受講にあたっての
アドバイス等

Part 2　教員から

教育学部

吉田　茂樹

知識と経験が結びつく学びの場

「課題探求実践セミナー」では、第１学期（７月初旬）に環境ボランティア活動として、小学生の子どもたちと一緒に清掃活動とレクリエーション活動（ゲーム）を実施しました。大学に入学してきたばかりの１年生にとって、初めて実際の子どもたちと触れ合う経験となる場です。開始後すぐに、興奮しすぎた一人の男子児童が鼻血を出してしまいました。私はすぐにティッシュ・ペーパーを手にしましたが、思い直して、しばらく学生たちの対応を見守ることにしました。

彼らの対応は素晴らしかったです。まず動揺する子どもに「だいじょうぶだよ」と声をかけ、その場に座らせてやや下を向かせました。同時進行で、一人の学生がティッシュ・ペーパーを鼻の下にあてがって血を受け止め、さらに親指と人差し指でいわゆる小鼻の部分を圧迫しました。別の学生が私のところへ走ってきて、「先生、保冷剤をお願いします」とアイシングの準備をしました。

実は、彼らのこのスムーズな対応は、２週間前に「大学基礎論」で学んだ「救急処置法」の知識に基づいています。講義で基礎的な知識を学んでいなかったら、彼らはおそらく自分の経験則に従って、「上を向かせる」「仰向けに寝かせる」「首の後ろをたたく」などの誤った対応をしてしまったのではないかと思います。

知識は「知っているだけ」では役に立ちません。知識は実際の場で使ってみる経験を通して、初めて記憶に深く刻み込まれて体にしみこんでいきます。「大学基礎論」「学問基礎論」などの初年次科目で得た知識は、「課題探求実践セミナー」で実際に使ってみる経験を通すことで、「生きて働く力」として彼らに身についていきます。高知大学の「先生の卵」たちが、たくさんの栄養分を在学中に吸収し、力強く学校現場に羽ばたいて行ってくれることを祈っています。

理学部

川畑　博

「課題探求実践セミナー」から思う、学びの姿勢

私はこの2年間、初年次科目である「課題探求実践セミナー」を担当してきました。この授業では、グループワークが中心になります。グループ内のメンバーと協力しながらテーマを設定し、集めた情報をもとに考えをまとめて、パワーポイントを使って発表するという授業内容です。途中に設ける中間発表では、他グループから意見を聞くことができるので、発表の構成や方法を軌道修正しながらゴールを目指すことができるようになっています。授業に当たっては、受講生一人一人が主体的に議論に加わり、行動することが必要です。一方、教員にはファシリテーターの役割が求められます。私たちは、グループワークの進み具合を見ながら、必要最小限のアドバイスをします。

アンケートを見てみると、授業内容におおむね好意的な受講生が多いようです。その一方で、受講生自身が授業を進めていかなければいけないことへの不満も見受けられます。また、発表後の質問タイムに出る意見が厳しいと感じる人もいるようです。優しく、丁寧に、教わりたいという考えが強いのかもしれません。

「課題探求実践セミナー」で行うことは、卒業研究の進め方や、社会に出てからの働き方と基本的に同じです。取り組むテーマや期間は違っても、自ら考え、行動して一歩ずつ前に進めることが必要になります。だからこそグループワークが、インターンシップや就職面接にも利用されているのでしょう。卒業研究や働き方の基本を練習していると思えば、前向きな気持ちで授業に臨めるのではないでしょうか。

「課題探求実践セミナー」のような「自律協働学習」は大学の授業の中では少数です。しかし、座学中心となる講義でも、教わるのではなく、自ら学ぶという意識で臨んでみてはどうでしょう。講義の中で伝えられることは限られています。講義内容を手がかりに、関連項目について時間外学習を進めれば、自ら学ぶ姿勢が身につきます。これが身につけば、どんなことにも道を開いていけるはずです。もちろん、そのような姿勢で授業に臨んでもらえるよう、私たち教員も工夫を重ねて行かなければいけないと考えています。

人文学部

岡田　健一郎

「大学基礎論」について

今回は私が所属する人文学部社会経済学科の初年次科目のうち、1年生第1学期の必修科目である「大学基礎論」をご紹介したいと思います。

1．概要

大学基礎論ではまず、定員10名前後のゼミを12個程度つくります。そして最初は全ゼミ生が一堂に集まって学科長から「大学で学ぶとはどういうことか」についてのガイダンスを受けます。その後はそれぞれのゼミに分かれ、3回かけて1冊の新書を読み、4回目で本の内容についてプレゼンなどを行う、というプログラムを3回繰り返します。各回ごとに教員が交代しますので、各ゼミは3人の異なる教員からゼミ指導を受けるわけです。

2．ねらい

この科目のねらいは主に4つあると考えています。第一に、1冊の本を読み通す経験を3回繰り返すことで、本に対する抵抗感を取り除き、自信をつけてもらうことです。第二に、毎回必ず学生は読んだ本の箇所に関するペーパーを提出することになっています。つまり、少なくとも合計9回はペーパーを書くわけです。これを通じて文章の書き方などを身につけてもらいます。第三に、3人の教員に接することで、色々な専門分野の入門的な知識に触れてもらうことです。第四に、ゼミというものを体験し、他の人の話を聞き、自分の考えを伝える練習をしてもらうことです。

3．感想・反省点

毎年ゼミ開始当初は、学生のレジュメや報告はなかなか上手くいきません。それは当然のことです。ですがゼミという小集団の中で比較的手間をかけて指導することで、多くの学生の能力は確実に向上していきます。学生にとってはなかなかハードな内容だと思いますが、3年間修正を加えながらこのやり方を続けてみて、一定の成果を残してこられたのではないかと考えています。

医学部

寺下　憲一郎

初年次科目「課題探求実践セミナー」

平成20年度から初年次科目として開講している「課題探求実践セミナー」では、学生の能動的・主体的な学習を促進し、課題探求力や社会性およびコミュニケーション能力の育成を目的としている。

看護学科においては、Problem-Based Learning tutorial教育をモデルに授業を構築し、学生自身を中心とした問題解決型の授業を展開している。平成26年度は授業のテーマを「地域住民の命を守る経験型防災学習」とし、地域で生活する人々の災害に対する準備状況の把握・課題の明確化、行政組織との情報の共有、さらに災害時における看護学生としての役割の明確化を目的とし学習を展開した。

東日本大震災での大規模な災害は記憶に新しいが、ここ高知県においても南海トラフ地震による被害予想がなされており、まず、高知県庁災害対策課職員から行政の取り組みについての講義を行い、高知県における災害対策の現状について学習した。また、高知県行政による災害対策の現状を踏まえたうえで、地域住民による災害対策についてグループごとに調査項目を作成し、フィールドワークによる地域住民との対話・調査を実施した。住民との対話については、小蓮、岡豊地区の住民に地区の公民館に集まってもらい、学生が事前に作成した調査項目を活用しながら調査を行った。

調査結果については、グループごとに結果内容をまとめ、看護学生としての視点を加えたポスターを作成しプレゼンテーションを実施することで、他のグループとの情報共有を行った。加えて、フィールドワークに協力してくれた岡豊地区の地域行事に参加し、フィールドワークで調査した結果のポスターを掲示し、地域住民への調査結果の還元を行った。

地域におけるフィールドワークにより、地域住民であるという意識を持ち、さらに災害時における看護学生としての役割を明確にできた。

農学部

松岡　真如

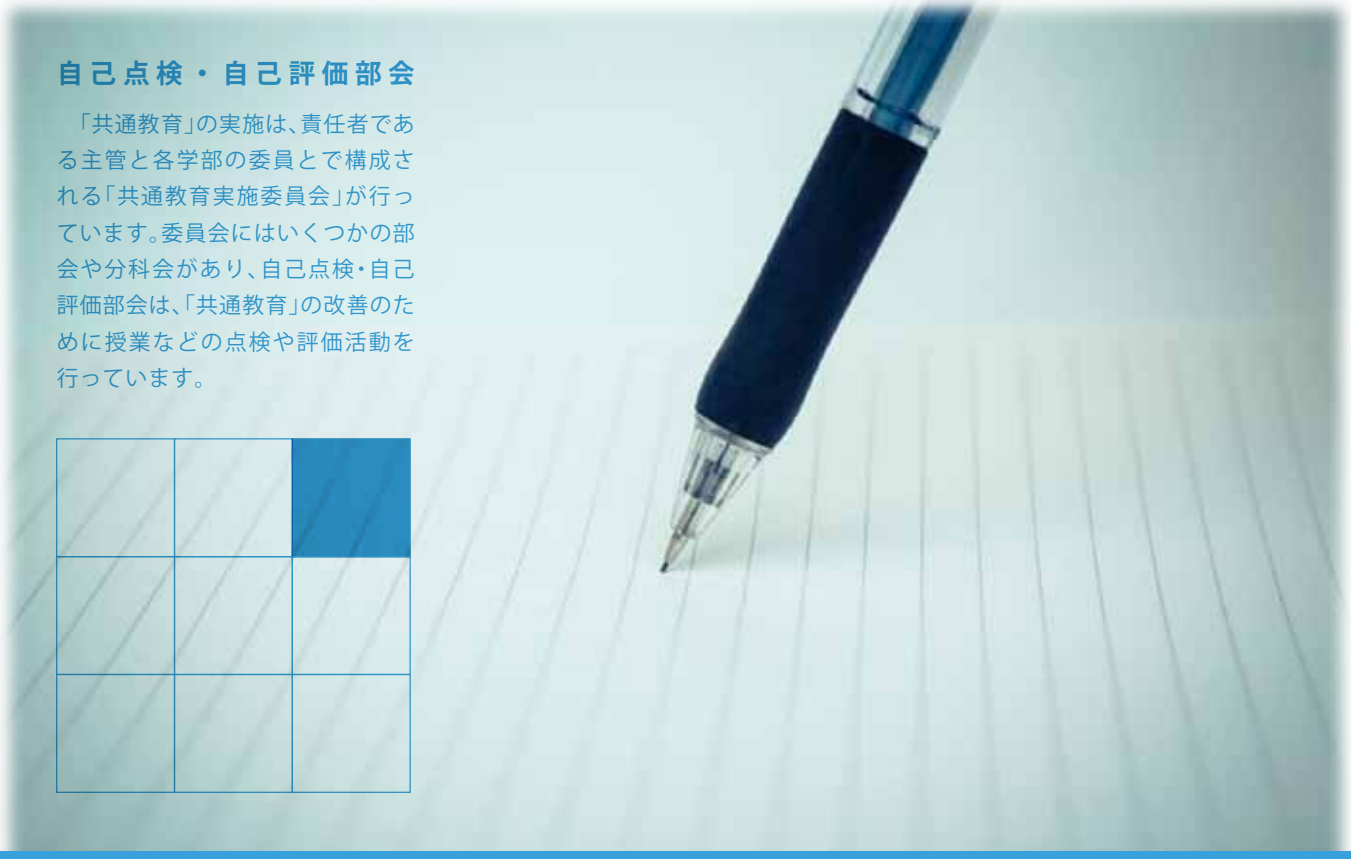
「大学基礎論」について

昨年度（平成26年度）携わった大学基礎論について書こうと思う。

第1回から第3回は物部キャンパスで開講された。入学当初でもあり、農学部長の講義やアドバイザー教員との面談など、大学生活に関する幅広い内容で実施された。また、次回からのグループワークへの話題提供として「農学部で何を学ぶのか」と題した講義が行われた。これを受け、第4回～第6回ではグループごとに議論や情報収集、発表資料の作成を行い、その成果が発表された。その後は、第7回～第11回と、第12回～第15回の2期間に分け、それぞれ「地域社会と大学との関わり」、「国際社会と大学との関わり」をテーマとしてグループワークが行われた。大きなテーマから興味のある事柄に的をしぼり、資料収集や時には現地調査なども行いながら大学と社会との関わりを調べてゆくのは、初年次科目としてとても良い内容ではないかと思う。

一方で、学生さんには申し訳ないが、私はこの手の授業が苦手である。議論を活発にする雰囲気を作ったり、適切なアドバイスをするのがとても難しい。ファカルティ・ディベロップメントでグループワークの進め方について指導を受けたこともあるが、使えるようにはなっていない。質問などを受けても気のきいた答えがなかなか出せず、他の先生と一緒で本当に良かったと思っている。

第2学期に実施されたアンケートに「大学基礎論は大学の学習を始めるにあたって役に立ちましたか？」という設問があり、回答は、役立った：17%、やや役立った：39%、ふつう：29%、あまり役立たなかった：12%、役立たなかった：3%と、過半数が肯定的な回答であった。ただ、大半がグループワークであった事を考えると、この数字はグループの活動や個人の姿勢に対する、学生自身の評価といえるのではないだろうか。教員の関わり方によって、この評価がどのように変わるのか、少し気になっている。



自己点検・自己評価部会

「共通教育」の実施は、責任者である主管と各学部の委員とで構成される「共通教育実施委員会」が行っています。委員会にはいくつかの部会や分科会があり、自己点検・自己評価部会は、「共通教育」の改善のために授業などの点検や評価活動を行っています。

共通教育自己点検・自己評価部会の活動

共通教育自己点検・自己評価部会長　松井透（理学部）

共通教育自己点検・自己評価部会は、FD部会と連携・協力しつつ共通教育の各分科会で行われる自己点検・自己評価活動の統括および支援を行う部会です。平成26年度は「授業改善アクションプラン」の実施と、これまでの総括を行いました。「授業改善アクションプラン」は次に示す４つのプロセスからなります。

1. 授業開始５週目に学生アンケートを実施し、授業内容に関する学生からの意見を集約します。
2. ５週目アンケート結果を様々な角度から分析し、授業内容をどう改善していくのが良いかを考えアクションプラン（授業改善計画）を作成します。
3. 作成したアクションプランを学生に提示し、その内容に則した授業改善を開始します。
4. 最終の授業時に「15週目アンケート」を実施し、アクションプランで提示した授業改善がどの程度の効果があったのかを検証するとともに、次年度に向けたさらなる改善点を考えます。

このように教員が学生からの意見を参考に授業改善を行い、より良い授業を目指す取り組みです。本稿では平成24年度と25年度に実施されたアンケート結果を振り返り、「授業改善アクションプラン」の効果を検証してみようと思います。

まずはそのものズバリ、授業改善アクションプランは授業をより良いものにするために効果があったのかを見てみましょう（図１）。全体の約3/4の学生が「はい」または「どちらかといえばはい」という肯定的な意見となっています。また、「いいえ」または「どちらかといえばいいえ」という否定的な意見は１割に満たない結果となっています。このことから授業改善アクションプランは一定程度の成果をあげているものと思われます。

次にアンケートに回答することで受講生の声により授業が改善されているかを見てみましょう（図２）。全体の2/3の学生が肯定的な回答をしていま

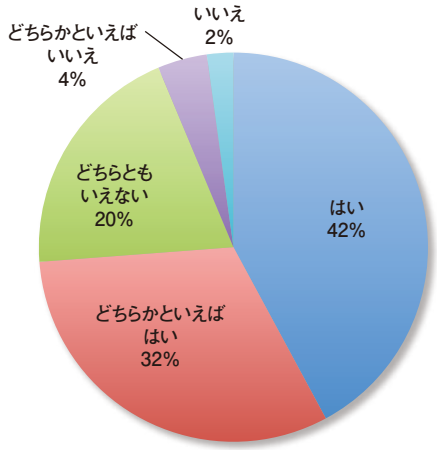


図1. 設問「授業改善アクションプランは授業をより良いものにするために効果がありましたか?」についての回答の割合

す。また、否定的な意見はこちらも１割に達しませんでした。同時に「どちらともいえない」と回答した学生の割合が約1/4となっていて、学生からの多様な意見を活かしきる難しさも見えてきています。

これらの結果から、「授業改善アクションプラン」はなかなか良い感じに実施されているように見えます。しかしながら、教員は授業をより良くするための試みをしていると思いますか？という設問を見ると（図３）、５週目の段階ですでに７割を超える学生が「はい」または「どちらかといえばはい」と回答しています。授業改善アクションプランを実施している教員の多くは、もともと授業改善に積極的であることが分かります。とはいえ、15週目では「はい」が増え「どちらともいえない」が減少していることから、授業改善アクションプランにより教員がさらなる工夫を行っていることも分かりますね。我々としてはもっともっと多くの教員に実施してもらいたいところではありますが、オムニバス形式の授業など「授業改善アクションプラン」の実施が難しい授業も多く、一筋縄では行かない難しさもあります。

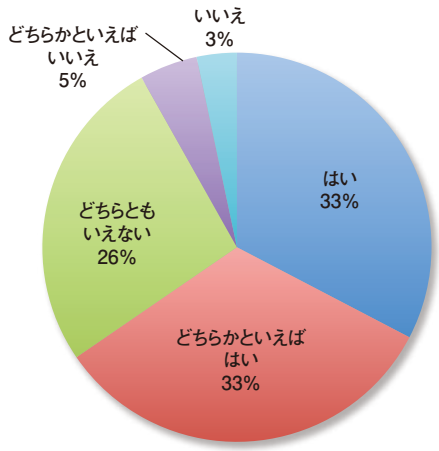


図2. 設問「アンケートに回答することにより、受講生の声によって授業が改善されたと感じますか?」についての回答の割合

最後に、アンケートを採ること自体が学生さんの負担になっているかどうかを見てみましょう（図４）。実に３割を超える学生が「はい」または「どちらかといえばはい」と答えていて、アンケートそのものを負担に感じているようです。この点は「授業改善アクションプラン」を継続実施していくためにも今後の大きな課題となりますね。ちなみに平成26年度は事前にアンケート内容をKULASを通じて学生に周知するなど、時間内にさっと回答できるよう工夫してみました。

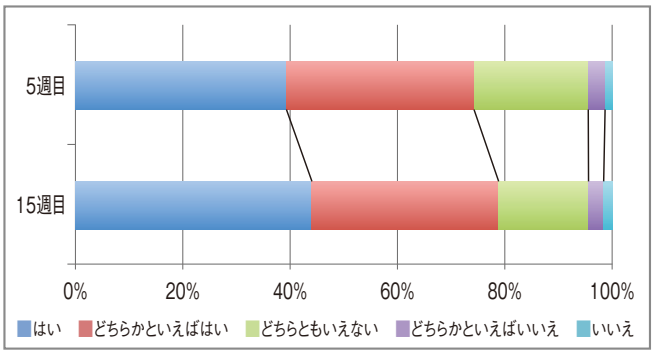


図3. 設問「教員は授業をより良くするための試みをしていると思いますか?」についての回答の割合

授業改善は学生からの声があってこそ実現可能です。皆さんもアンケートに回答する際、自分の意見をしっかりと持ち、教員にぶつけて下さい。少しずつかもしれませんが、確実により良いものへと変わっていくと思います。

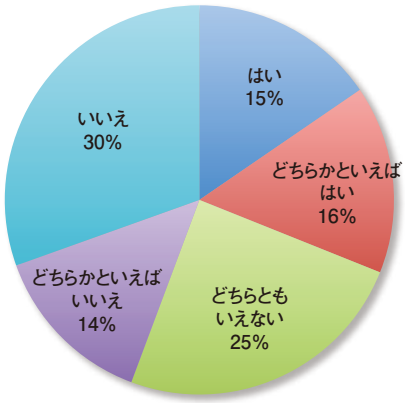


図4. 設問「授業改善のためのアンケートに回答することを負担に感じましたか?」についての回答の割合

PROGテスト（ジェネリックスキルテスト）の実施について

共通教育実施委員会 FD 部会長　立川　明

PROGテストの実施

共通教育実施委員会では、2013 年度より「課題探求実践セミナー」を受講する１年生を対象に、PROGテストを実施しています。PROGテストは、河合塾とリアセックが開発した、ジェネリックスキル（基礎力）を測定するテストです。基礎力を「リテラシー：知識を活用して問題を解決するチカラ」と「コンピテンシー：人と自分にベストな状態をもたらそうとするチカラ」に分けて測定しています。2013 年度に受験した１年生が３年生になることから、本年度は１年生に加え、２年前に受験した３年生を対象にPROGテストを実施しました。各学部の協力を得て、オリエンテーションでアナウンスを流し、以下の日程で実施しました。

実施日程

PROGテスト	平成27年4月6～8日
解説会	平成27年5月18～22日

受験者数一覧

所属	1年生	3年生
人文学部	153	22
教育学部	133	20
理学部	261	97
医学部	164	165
農学部	160	79
地域協働学部	67	–
土佐さきがけプログラム	17	9

１年生の結果概要

高知大学１年生の入学時点のリテラシーは、全国の国公立大学文系１年生の平均 4.5、理系 4.37 に比べて、各学部の平均で4.75～5.87 にあり、少し高い結果になりました。学科ごとの平均でも、4.7 以上有り、全国平均より少し高い結果でした。

コンピテンシーでは学部ごとのばらつきが大きく、全国文系 3.17、理系 3.12 に対して高知大学１年生の学部ごとの平均は 2.6～4.0 の範囲でした。最近はどこの企業もコンピテンシー面接を取り入れています。公務員試験でもそろそろコンピテンシー面接を取り入れているところが出始めました。公務員試験にコンピテンシー面接を取り入れた自治体では、当然教員採用試験でもコンピテンシー面接が行われるようになるでしょう。就職活動までの２年間でコンピテンシーを伸ばすことが求められます。PROGテストの結果の返却時に解説会を行い、どういう体験がリテラシーやコンピテンシーを高めるかは、資料により受験者に提示されています。どうかこれらの資料を活用して各自取り組んでもらいたいです。

３年生の結果概要

３年生の受験者が該当者の50% 程度にとどまったのが少し残念です。受験しなかった学生は情報収集能力に弱点があるとか、キャリア形成に関心が無いことが予想されますので、各学部での指導が大変かも知れません。

リテラシーの結果は、全国の文系三年生の平均 5.08、理系の 4.80 に比べ、各学部の平均で 5.38～5.96 の間に有り、少し高い結果となりました。

コンピテンシーでは、全国文系 3.21、理系 3.17 に比べ、学部ごとの平均で 2.85～3.78 の間に有り、全国平均を下回る学部が２学部、全国平均レベ

ルが1学部、3学部が全国平均を上回るという結果です。新聞等でも分かるように採用スケジュールに関する協定が守られておらず、3年生の冬には実質採用試験が開始されます。この半年の間にどれほどコンピテンシーが伸ばせるかが、ほしい内定がもらえるかどうかの分かれ目になるでしょう。

3年生の伸びについて

本年度受験した3年生の内、1年生の時に受験した学生について、変化量を測定しました。以下、測定量の平均について報告します。補正を行った後の結果で、単純な引き算ではありませんが、ここでは詳細は省略します。リテラシーについては、学部ごとの平均で 1.52～1.71 の伸びが見られました。

コンピテンシーについては、2つの学部で変化がほとんど無く、4学部では0.40～0.60 の伸びが見られました。リテラシーに比べると到達点も伸びも低めです。

学生は共通教育だけでリテラシーやコンピテンシーを伸ばす体験をしているわけではありませんが、リテラシーについては大学教育の影響が大きいと予想され、1.5 ポイント程度の伸びが観測できたことは共通教育を含めて大学教育の効果であると言えるでしょう。一方、コンピテンシーについては社会体験でも伸びる要素があるにもかかわらず、大きな伸びが認められなかった事から、共通教育を含む大学教育でもコンピテンシーを伸ばす事はできなかったと分析できるでしょう。どのような取り組みがコンピテンシーを伸ばすのかを共有し、できるだけ多くの授業で取り入れることが必要になるでしょう。

編集後記

初年次科目は、大学生活での学びの基礎になるはずです。「特集」を1年生は参考に、上級生は初心にかえって、ぜひご一読ください。(K)

PROGテストは、学生にとって今の自分を知る良い機会になったと思います。1年生は2年後にぜひ受験して、今回の結果と見比べてみてください。(Y)

高知大学共通教育広報誌 PipeLine［パイプライン］No.45

発　行 / 高知大学共通教育実施委員会
編　集 / 共通教育実施委員会広報部会
〒780-8520 高知市曙町2丁目5-1
☎088-844-8168（学務課全学・共通教育係）
発行日 / 2015年6月
制　作 / ㈲西村謄写堂

□広報・記事についてのご意見をお待ちしています。
Mail : gm06@kochi-u.ac.jp